

房総の美術史

月報

第43号

昭和62年6月30日
千葉県立美術館
千葉市中央港1-10-1
電話0472-42-8311(代)

俵光石特集



「魚藍観音像」俵光石 昭和6年冬

(石造 総高48.5cm 保科家蔵)

房総の作家素描 その XXXX III

たわら 俵 こう 光 せき 石 (明治元年 1868 ~ 昭和10年 1935)



◆房州彫刻の流れ

房総半島の南端房州(安房国)には、古代末以来の彫刻の流れを確認できるのであるが、近世の江戸中期以降明治までの房州の3彫刻師として、現鴨川市打墨生まれの武志伊八郎信由(通称波の伊八、宝暦元年(1751)~文政7年(1824))とその後裔、現安房郡三芳村生まれの武田石翁(安永8年(1779)~安政5年(1858))、現安房郡千倉町生まれの後藤利兵衛橋義光(文化12年(1815)~明治35年(1902))の三者の名が挙げられていた。

武志一族と後藤義光は、木彫を得意とするいわゆる宮彫刻師で、主に房州内外の神社・仏閣の欄間彫刻・社寺建築彫刻など多くの遺作を残し、武田石翁は、同地方に多くの主として石彫の遺品を残している。

明治洋風彫刻界における民間彫刻家の第一人者小倉惣次郎(弘化2年(1845)~大正2年(1913)、本月報第29号参照)は、武志一族に連なる房総宮彫師の最末端に位置し、現代の木彫の巨匠の一人に数えられる長谷川昂(明治42年(1907)~、本月報第11号参照)は、武志信由と同じ鴨川市(粟斗)の出身で武志一族の彫刻を見て育っている。

俵光石が、これら三者のどの流れに属するか、あるいは別系統か、現在つまびらかでないが、確かな地方彫師の輩出した房州の風土性の中から生まれ出ていることは明らかであろう。

なお、昭和52年には、県立安房博物館において、「安房の彫刻三人展—武志伊八郎・武田石翁・後藤義光—」展が開催されている。

◆祖父長左衛門、海南刀切神社の^{なだぎの}狛犬製作

房総半島の最南端、館山市見物の地に海南刀切神社がある。この社は、その名の通り、海に生きるこの地方の先人が、海上の安全祈願のため深く崇敬したものであろう。

その社頭には、伊豆小松石製の石造狛犬(写真1)がある。台座には、「時天保十年歳在己亥五月吉旦 楠見村石工田原長左衛門 京橋石川岸彫工兼吉」と刻まれている。この天保10年は、あの鳥居耀蔵・江川坦庵らによる江戸湾岸備場巡視の年であり、「楠見村田原長左衛門」のうち、楠見村は現在俵家のある場所の旧表示、

長左衛門は俵家の屋号であり、この人は光石の祖父にあたる人とみられる。この狛犬寄進は、江戸湾岸にある当地方の人々が、伝え聞く(維新前夜の)多難な時代の展開を予見しての祈願も込めたものと見てよからうか。

狛犬自体の製作に、どこまで長左衛門が関与したか明らかではないが、この工事の責任者であったことは確かである。長左衛門の石彫技術が、安房の彫刻のどの流れに連なるかも明らかではないが、幕末期少なくとも館山地方では、石工として知られた存在であったことも確かであろう。また、彫工が京橋の人であること、石材は伊豆小松石を使用しているなど、江戸湾岸相互の交流が深かったことをうかがわせる。

田原家には、毎年、正月、必ず床の間に掛けて飾り礼拝した肖像掛軸(写真2)がある。同家は、館山でも、なかなか格式の高い家柄であったのであろう。

◆光石、明治維新の激動期に生まれる

光石に関する文献には、その姓を「田原」としたものと、「俵」としたものととの混乱が見られるから、維新前後、何らかの事情で田原が俵になったのであろう。

光石は明治元年、旧楠見村(現館山市)の俵家に生まれた。この年は、慶応4年に当たり、この年の7月には、いわゆる房総新藩が成立した年で、その一つ、駿河国(現静岡県)田中の本多家がこの館山の地に転封されて長尾藩が誕生した年でもある。光石は、まさに時代の転換期、日本の激動の最たる地にその生を受けたのである。

長尾藩本陣は、光石家からほど遠からぬところにあった。やがて、明治2年の版籍奉還、明治4年の廃藩置県と、次々に実施される新政府の施策に応じて、旧長尾藩関係者の大半も上京して、楠見村・館山の地は平静を回復、光石も石屋の家業に精励して、石彫に一方ならぬ探究心を燃やしていたという。

◆光石、上京して高村光雲のもとへ

光石の精進・探究ぶりが、当時馬の彫刻家として著名であった後藤貞行の知るところとなり、少なくとも明治24年には、貞行のもとで仕事をしており、社会的に現れないが、腕のある人、「後藤貞行の伝」、田口掬江著、『中央美

術」第22号、昭和10年5月)として識者の間では通っていたようである。

明治22年に開校した東京美術学校では、明治25年には、彫刻科第3学年以上の実習として、木彫科・石彫科・牙角彫刻科のいずれかを専攻することになった。これは、当時彫刻科の教授であった高村光雲の提案によるものようである。その背景には、当時の新聞も伝えるように、東京などにおける美術的彫工の需要が急に増したことも関係するようである。

後藤貞行は、明治23年には、東京美術学校の教師となって高村光雲のもとにいたから、光雲の要請によって、自分のもとにいた光石を光雲に預け、光雲は光石を指導して石彫科開設に備え、明治27年、光石は彫刻科石彫教場助手に任命されている。東京美術学校初の石彫教官であろう。このころから、光石は、本名の房吉から光石を名乗るようになった。

光石は、次の年明治28年に京都で開催された第4回内国勸業博覧会に、東京在住者として出品している。目録には、「置物(大理石羊)四拾八円倭光石」とある。この彫刻の材質が大理石であることは、工部美術学校のラグーザが招来した大理石彫刻との関連で、多大の興味を覚えるが、今は、単にそのことを示唆するにとどめる。

この時、光石は、京都で山本瑞雲ら僚友と記念写真(写真3)を撮っている。その後、瑞雲は外遊しているが、光石は外遊できなかったことを生涯悔やんでいたという。

房総の片田舎の館山から上京して、後藤貞行・高村光雲の指導も受け、東京美術学校の教師にもなり、勸業博にも出品した光石は、石彫修業の一応の目的を達したことになる。その後東京美術学校を、いついかなる理由で辞したかも定かではないが、明治30年には、地元館山へ帰り、家業の石屋を営み、弟子も何人か抱え、近隣の寺院の石彫仏像の制作にも励んでいたことが、現存の遺作からも知られる。

■館山における光石の仕事

1. 不動尊立像 同坐像 館山市上真倉 妙音院 〔注、以下特に断らない限り石造〕

「明治三十年春 倭光石刻」(2体とも)

台座付きの50センチメートルほどの像2体だが、光雲の木彫を石彫に写した訓練が身につけているのか、シャープな衣文など木彫の感じに近い。光背火炎の中に鳥を刻む。(写真4)

2. 地藏尊倚像並びに両脇侍立像 3体

館山市南条 観音寺

「明治三十三年 倭光石之作」

2メートル余の基壇の上に座する地藏尊。脇侍の破損が著しい。

3. 釈迦坐像 館山市館山 三福寺 「明治三十六年十一月建立(他略)」 「高村光雲門下 倭光石刻」(写真6)

三福寺は、倭家の菩提寺。2メートルほどの基壇台座の上に、光背と一体で座す1メートル弱の釈迦像。(写真6)インド系の石膏雛型(倭家蔵、写真5)から拡大された像容。光石の最も大きな作品。異国風の石像の上には、覆いかぶさるように菩提樹が枝を広げていて、エキゾチックな仏浄土を思わせる。

その他、市内上真倉慈恩院の「南陽坪野先生之墓上部彫込地藏尊」など光石の遺作は多いのであるが、これら光石の石彫仏像彫刻群は、房総における信仰の対象となる仏像の掉尾を飾るものであるとともに房総における近代彫刻の魁となるものといえようか。

4. 虎像 テラコッタ 館山市館山 倭家 「大正三年八月 虎 安房陶器創業者 光石(刻印)」

最晩年には、魚藍観音の優作を残した光石だが、大正期に入ってから、事業欲にかられたのか、陶業をも手がけている。倭家には、このことを物語る精巧な彫刻技術をうかがわせるテラコッタの虎の像(写真7)がある。この完成のため、陶土を求め、陶場を築き、失敗に失敗を重ね、家産を傾けたといわれる。

5. 狛犬 一對 館山市館山 館山神社 「大正六年八月吉日」(呼像) 「(略)石彫 倭光石」(阿像)

6. 魚藍観音像 館山市長須賀 保科家 「昭和六年冬 倭光石謹作」(表紙写真)

総高48.5センチメートル。原石は、郷土嶺岡山系のいわゆる「ろう石」で、よく磨かれ黒い光を放っている。時に光石63歳、死の4年前、制作中の光石の胸中をよぎるものは、何であつたろうか。もはや、何物にもたじろがない石彫家光石の最後の光芒である。ブロンズ像に似た像容で、円熟した最晩年の作。3体同時に彫ったというが、現在2体は行方不明である。

なお、現在、館山市内(布良)本郷観音堂墓地の「酒樽墓」など10数体の石造彫刻が確認できるが、以上で、光石の作家像は浮上して来よう。

光石没して既に半世紀、ようやくその業績が近代日本彫刻史との関連の中で、脚光を浴びつつある。光石を世に出した高村光雲、その光雲の築いた東京美術学校彫刻科、その美術学校創立百周年の年に、光石の足跡を追うのもまた奇縁といわなければならない。(中地昭男)

(本稿執筆に際し、東京芸術大学教育資料編纂室、館山市立博物館、倭家当主恒美氏には、終始お世話になったことを申し添えます。)

資料

俵光石関係資料



写真1 「狛犬」 天保10年 (石造 館山市見物
海南刀切神社)



写真2 「年賀用肖像掛軸」
(俵家蔵)



写真3 「第4回内国勲業博覧会見学記念」
明治28年 (向って左端光石)



写真4 「不動尊立像」 明治30年
(石造 館山市上真倉 妙音院)



写真5 「釈迦像雛型」
(石膏 俵家蔵)

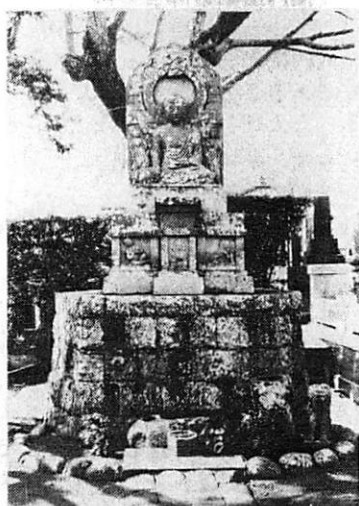


写真6 「釈迦坐像」 明治36年
(館山市館山 三福寺)



写真7 「虎像」 大正3年
(テラコッタ 俵家蔵)

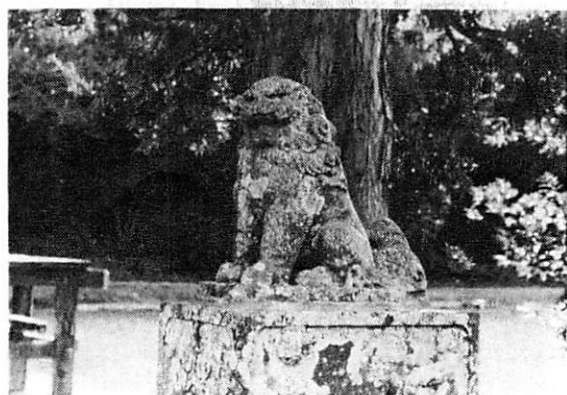


写真8 「狛犬」 大正6年
(石造 館山市館山 館山神社)